令和7年度(2025年度) 学校評価総括表　　【伊丹市立花里小学校】

教育目標	つよく　やさしく　たくましい　花里の子　～自他のよさを認め、自ら学び、考え、行動する子どもの育成～
重点目標	【重点1】安心して過ごせる居場所づくり【重点2】生きる力の育成　【重点3】学力向上・資質向上　【重点4】学校・家庭・地域との連携

主要施策	施策目標 基本施策		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携 ④情報活用能力の育成 ⑤英語教育の充実 ⑥デジタル化の促進	・基礎的、基本的な知識・技能を習得する。 ・家庭学習（自主学習を含む）を定着させる。 ・一人ひとりが主体的に学び表現力を高める。 ・豊かに表現できる思考力、判断力、表現力を育てる授業を展開する。 ・読書活動を充実させ、語彙力の獲得を図る。 ・授業の展開を工夫し、学習意欲を向上させる。 ・児童の情報活用能力の育成を図る。	・教科担任制やT.Tなど多様な授業形態を工夫し、基礎・基本の定着を図る。 ・朝学習の徹底と内容の充実を図る。 ・CRT調査等による実態把握と対策を行う。 ・3年生から自主学習に取り組ませる。 ・各学年に応じた「家庭学習の手引き」の配布と、自主学習の内容を紹介する等の工夫を行う。 ・家庭学習や生活に関する振り返りのアンケートをPTAと連携して行う。 ・学校運営協議会と協力して、放課後や夏休みの自主学習を個別支援する場を設定する。 ・自分の考えを持ち、それを表現する力を育成するため、児童が一人で考える時間や話し合う時間をとる、様々な単元のゴール設定を工夫するなど、授業作りを工夫する。 ・どの教科でも、意見交流の場を効果的に取り入れていく。 ・週1回の図書の時間や朝読書などを利用し、読書の時間を充実させ、語彙力や表現力を豊かにする。 ・読書10分を週末の課題で出す。（やってみる） （全クラス共通） ・朝学で読書の曜日をつくる。 （各学年で曜日を設定する。） ・各教科に合わせてiPadやモニター等のICT機器を有効活用し、互いにその活用場面を気軽に共有することができるような場所を設定する。（自主研修を活用） ・夏期研修で情報活用について行う。 ・タブレットの操作などにおいて、情報活用能力を高める。 ・情報モラル教育の年間カリキュラムを組み、各学年月1回以上実施する。	・児童アンケートで、「授業がわかりやすく、楽しい」と回答した割合が80%以上になる。 ・学年×10分＋20分の家庭学習（自主学習を含む）に取り組めるようにする。 ・放課後自主学習教室を開放し、児童が自主的に学ぶ場を設ける。 ・ワークシートや振り返りで、考えの深まりが見られる。 ・児童アンケートを実施し、「はい」の回答が、「授業で自分の考えを持っている。」で9割、「授業(じゅぎょう)で、友だちの話を聞いて、自分の考えが変(か)わったり、新しい発見(はっけん)があったり、「なるほど」と思ったりすることがある。」が7割以上になる。 ・1週間の読書時間、合計60分以上を達成する。（図書・朝読・読み聞かせ・教室での隙間時間の読書も含む） ・保護者対象の「学力向上研修会」を2回開催する。 ・月10時間以上活用することを目標とし、効果的な活用方法の研修や情報交流を行う。 ・児童アンケートで「タブレットやテレビモニターを使った授業はわかりやすい」と回答した割合が80%以上になる。また、教職員アンケートで「ICT機器（タブレット、モニターなど）を活用した教育活動を行っている」と回答した割合が90%以上になる。	B	・児童アンケートで「授業がわかりやすく、楽しい」と回答した割合は85%であった。 ・全体では85%であったが、学年によっては90%を超えたり80%に満たなかったりとばらつきがあった。 ・平日60分以上家庭学習に取り組めている割合は、4年生は23%、5年生は19%、6年生は21%と、昨年度よりも低い結果となった。また、保護者アンケートの「家庭で学習の習慣が身についている。」という項目でも、身についているという回答は67%にしか満たなかった。 ・放課後自主学習教室は、開放しているが、参加する児童は限られていて、自主学習の定着には繋がりにくい状態であった。 ・振り返りを通して、今日の学びを自分のものにする習慣は少しずつ付いてきている。 ・児童アンケートの結果、「授業で自分の考えを持っている。」が79%、「授業で、友だちの話を聞いて、自分の考えが変わったり、新しい発見があったり、『なるほど』と思ったりすることがある。」が85%、肯定的な回答であった。前者は2024年度の73%より向上しているが、目標には届かなかった。後者は2年連続80%を超えている。 ・読書ボランティアによる朝読書での読み聞かせの回数を大幅に増やし、全学年実施した。 ・学校司書と連携して、花里読書フェスティバルを実施したり、図書委員が学級文庫を選別したり、本に触れやすい機会を多く設けた。 ・一週間の読書時間が70分以上と回答した児童は、27%で昨年度より減っている。 ・伊丹西高等学校と連携し、保護者対象の学力向上研修会を2回実施した。 ・児童アンケートで「タブレットやテレビモニターを使った授業はわかりやすい」と回答した割合は、91%であった。また、教職員アンケートで「ICT機器（タブレット、モニターなど）を活用した教育活動を行っていると回答した割合は90%を上回った。	・引き続き、朝読書や基礎基本の定着を図る取り組みを続ける。 ・放課後の研修会などを通して、教師間で情報交換をする機会を増やし、授業力の向上を図っていく。 ・「家庭学習の手引き」の内容を改めて精査し、実態に合った目標・取り組み方に変えていくとともに、改めて保護者へ周知し、家庭での協力を求めていく。 ・放課後自主学習教室について、今年度の利用状況をふまえて児童・保護者へ改めて周知、参加を促していく。また、自主学習ノートの取り組み方について、具体的な例を示したり、上手なノートを紹介したりして、児童が意欲的に取り組めるような工夫をする。 ・授業における「めあて」と「ふりかえり」は継続して取り組みながら、自分の考えを持つ、友だちの話を聞いて比べたり見直したりする、といった授業づくりについては、教師がさらに学んでいく。そのための研修会や校内授業研究会の充実を図る。目標に届かなかったものについては、児童が、さらに自分の考えを持って学ぶことができるように、その方法や手立てを協議していく。 ・児童は、友だちと話し合う良さは感じているので、それが学ぶ意欲に繋がるように、授業づくりを工夫していく。 ・読書イベントの開催や内容について、より参加したくなるように、周知を行う。 ・図書ボランティアや学校司書と連携して、読書意欲を高められるように取り組む。 ・家庭と連携して、学校全体で読書の時間の確保に努める。 ・児童に読みたい本の希望調査をとり、手に取り、読みたくなる本を図書館に増やす。 ・ことば蔵と連携を図り、様々な教科で図書を活用できるようにする。 ・引き続き研修会を実施、保護者へ参加を促していく。 ・使う時間の多さを目標にするのではなく、効果的な使い方を目指して、教員間の情報共有に努める。	○本校の最重要課題は①学習習慣が十分身についていないことその結果として②学力の伸び悩みではないか。学テ等の結果を数値目標とし、結果分析に基づく更に精査・深掘りした「学力向上プラン」の策定が望ましい。（「学力向上プラン」のPDCA） ○児童アンケート「授業は分かりやすく、楽しい」の回答が学年によってばらつきが見られる。同学年でもクラスによって偏りがあるのではないか、この点を分析して、改善策を示す必要がある。 ○研修会や教師間の情報共有によって、「授業が分かりやすく楽しい」と回答した児童の割合が目標に達したのではないか。 ○児童が楽しんで授業に取り組める姿は、先生方が児童の興味関心を引き出す創意工夫された授業の結果である。 ○自主学習では、児童が自ら設定した課題に向かって調べ学習を行っている。興味関心を湧き立たせ、学ぶ喜びを実感できる取組である。 ○家庭において、本を身近に感じ、ちょっと読んでみようかと思える環境づくりが大切。 ○自主学習の習慣は、中高校生もついていない。場所やプログラムの提供にとどまらず、学習の必要性を子どもにいかに感じさせるかが重要。そのためにも小中高の連携の中で、それぞれの学びを見せ進路のモデルを示すこと、また、仕事に実際にふれ、キャリアデザインのベースを作ることが必要ではないか。 ○「読む・書く・聞く、話す」の力を育むには、まず「聞く」ことが大切。読み聞かせも効果的。 ○勉強嫌いにしない、楽しい学びへの取組の継続を
		「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	・自尊感情、自己肯定感を育成する。 ・学級作りを工夫する。 （支持的風土作り） ・いじめの未然防止、早期発見、早期対応に取り組む。 ・不登校の予防と解消を図る。	・子どものがんばりを学校と家庭で連携して認めていく。 ・学級の中で自分の意見が安心して言い合えるような雰囲気作り（クラス作り）を進めていく。校内研修（年2回）で学級作りについても考える機会を設ける。 ・いじめ等に関する実態把握のためのアンケート調査を実施し実態把握を行い、はやい対応を行う。 ・積極的に家庭へ連絡をとり、連携を図る。	・児童アンケートで「自分にはいいところがある」と言える子を75%以上に増やす。 ・児童アンケートで「自分を大切にすることや他の人への思いやりについて教えてもらっている」と回答した割合が80%以上である。 ・児童アンケートで「学校に来るのが楽しい。」と回答した割合が90%以上である。 ・登校への行き渋りが見られる児童に対して、職員研修や不登校対策委員会を開くなど全職員で取り組み、不登校児童数を減らす。	B	・児童アンケートで「自分にはいいところがある」と言える子が79%だった。 ・児童アンケートで「自分を大切にすることや他の人への思いやりについて教えてもらっている」と回答 した割合が89%だった。 ・児童アンケートで「学校に来るのが楽しい。」と回答した割合が88%だった。 ・不登校児童数は昨年度の同時期の比較では減少傾向だが、予備軍にあたる児童の数はどの学年にもおり、増加傾向にある。 ・不登校支援員や児童支援教員が、家庭に電話連絡をしたり家庭訪問をしたりすることで、不登校児童の出席日数が増えた。 ・別室（スマイルルーム）を整備したことで、不登校児童が学校で安心して過ごすことができる場所ができた。	・どの項目も昨年度に比べ向上しているが、目標に達していない項目もある。 ・アンケートの結果から学級で自分に割り当てられた役割については積極的に取り組もうとする姿が見られた。児童の自己有用感や、自尊感情を育てていくための取り組みとして、日頃の学級経営を学び会える機会を作り教職員の研修を深める。 ・不登校支援員や児童支援との連携や、運用を見直し、家庭と学校が協力できっるような支援をしていく。 ・別室（スマイルルーム）を活用することで、教室に気持ちが向きにくい児童が教室へ復帰できるよう支援する。	○児童アンケート「自分にはいいところがある」について、具体的にどのような「良いところ」かを選択肢があれば、改善策がもう少し具体化するのではないか。 ○スマイルルームの設置によって不登校児童数の減少が見られた。教室復帰をめざして継続していただきたい。 ○自分の良さは、他者から教わることが多い。「ほめほめ」カード等お互いの良さを認め合う活動等の取組を行うことでクラスの雰囲気が落ち着いたり、自尊感情を持つ子が増えたる効果有り。 ○いじめられる側の指導も大切。先生方には、アンケート以前に感じ取っていただきたい。 ○子ども同士の暴力に対し、表面層での判断をせず、深層部で関わり、解決してほしい。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	・自ら進んで体力を向上させようとする児童を育てる。	・運動の習慣化を図る。 ・運動イベントの実施(花里カップ・花リンピック・元気アップ運動等) ・睡眠、栄養、運動、休養などのバランスのとれた健康的な生活習慣を身につけさせる。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」を推進する。 ・食に対する指導を充実する。 ・感染症感染防止対策の徹底。	・週1回クラス全員で運動場に出て、体を動かす。 ・各学期に1回以上運動イベントを実施する。 ・夜は10時までに寝て、朝は7時までに起きている児童が75%いる。 ・朝ごはんを食べてくる児童が90%以上いる。	B	・今年度も運動イベントを各学期1回以上実施することができた。 ・今年度から児童アンケートに「業間休み、外に出て元気いっぱい遊んでいる」という項目を作成し、64%が「外で遊んでいる」と回答した。 ・「外でまったく遊んでいない」と回答した割合が、4年生8%、5年生15%、6年生16%と学年が上がるにつれて増えている。 ・食に関する指導やほけんだよりなど、健康な生活に関する手紙の配布時に教師が呼びかけることによって「早寝・早起きを心がけている」が82.3%、「朝ご飯を毎日食べている」が94%と目標を上回った。	・来年度も引き続き、開催時期や回数は検討しながら、運動イベントを実施する。 ・定期的にクラス全員で運動場に出て、遊ぶ機会を作ってもらえるよう声掛けをする。 ・引き続き、健康な生活に関する手紙などの配布の際や風邪などの流行の季節の際には、教師が一声かけ、児童に意識付けしていく。	○目標数値を上回っているのに、B評価の理由を明確にすることで、改善策が具体化するのではないか。 ○コロナ禍やスマホ使用の低年齢化もあって、体を動かす機会が減少している。スマホの時間をいかに減らすかは、体力の向上のみならず、学習時間の確保にもつながる。 ○運動イベントの取組の取組の継続を
		教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	・自ら課題を見つけ、考え・行動できる児童を育てる。 ・目標に向かって努力し、意欲的に学び続ける態度を育成する。 ・関係機関と連携を図り、児童理解に努める。	・「キャリア・パスポート」を活用し、4月に1年の目標設定を記入させる。 ・半年ごとに児童が自己の活動を振り返り、新たな目標や課題を持たせる。 ・子どもの成長を見取り、次の一歩を出せるようなコメントを教師や保護者が記入する。 ・スクールカウンセラーと細やかに連携を図り、児童理解を深める。 ・必要に応じて巡回相談を行う。	・児童アンケートで「自分は、将来の夢や職業について考えている」と回答した割合が80%以上である。また、教職員アンケートで「児童に夢をもつこと、仕事や働くことの大切さを教えている」と回答した割合が80%以上である。 ・長期休暇にスクールカウンセラーによる研修を1回以上実施し、児童の心身の状態を経年で理解する。 ・職員全体で気になる児童を月1回以上共有し、必要に応じて関係機関につなぐ。	A	・児童アンケートの結果は80%、教職員アンケートの結果は89.7%だった。 ・キャリア・パスポートに記入する際に、これまでを振り返ることで、自分の成長を感じることができていた。また、話し合い活動を通して、自分の良いところや課題を見つけることができ、新たな目標を持つことができていた。 ・ペア学級（縦割り活動）では、高学年がリーダーシップをとったり、思いやりを持って低学年に接したり、また低学年が高学年を尊敬したりと、キャリア形成に関わる機会となっていた。 ・スクールカウンセラーとSSWによる夏期研修会を実施し、愛着や問題行動など課題を抱える児童の心身の状態について理解を深めることができた。児童を多くの目で見守ったことで、保護者への丁寧な説明がよりよくできた。 ・月に一度の会議で必ず課題を抱える児童について報告して共有を図り、必要があれば関係機関につないだ。	・自己肯定感を高め、自ら考え・行動できるように、キャリア・パスポートへの適切なアドバイスや励ましのコメントを行ったり、日頃の取り組みや頑張りに対して言葉かけを行ったりする。 ・行事や活動などの後には、頑張ったことなどを振り返らせ、次の目標や意欲がもてるよう、フィードバックを行う。 ・働くことの意義や目標に向かって努力することの素晴らしさ・大切さを日頃から伝えていく。 ・課題を抱えている児童が増えてきていて、多様な支援方法が必要になってきている。保護者へ集団の中での様子や学習面での困り感などを担任だけではなくつながったスクールカウンセラーやSSWなどとともにとともに丁寧に説明していくことで、これからも関係機関にスムーズにつないでいく必要がある。	○ペア学級活動が良い効果を出している。課題をかかえている児童が増える中、自分の仕事や役割に責任を持って取り組んでいる児童が92%いることは素晴らしい。 ○ペア学級の取組を継続すると共に、中高生との関わりも検討していただきたい。
		特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実	・児童の実態把握に基づき、個別の支援計画などを作成し、保護者・教職員と連携をして、適切な対応を行う。 ・それぞれの子どもの、校内支援体制を確立する。	・特別支援学級保護者に対して、年2回以上の参観・懇談の実施。 ・教職員に対して、年1回以上の特別支援学級参観（授業公開）の実施。 ・通常学級に在籍する配慮を要する児童の特性や支援について、校内委員会や校内研修（年2回）で交流し、関連機関との積極的な連携を図る。	・かがやき参観・懇談を年2回以上実施する。懇談会に全体の半数以上の保護者が参加する。 ・全教員が特別支援学級児童を理解するための特別支援学級参観を年1回以上実施する。 ・コンサルテーションの実施等、関連機関と積極的に連携する。	A	・2回の参観・懇談を実施し、3学期に3回目を予定している。2回とも半数以上の保護者の参加があった。日頃のかがやきでの様子の共有をしたり、困りごとの相談をし合ったりする有意義な時間となった。 ・日々、交流級担任を中心に、特別支援学級での様子を見てもらっている。また、全教職員を対象に特別支援学級在籍児童の実態を伝える研修会を実施。 ・5月と2月に配慮を要する児童についての研修（生・同・特研修会）を行い児童の実態把握した。職員全員で情報を共有することで、児童理解に努めた。名前のあがった児童、月に1度の会議で名前のあがった児童は、継続して様子を確認できるよう情報を共有し、ファイルに記録をとった。 ・学校生活支援教員とつながって、通級についての理解を深めたり、多くの目で児童を支援したことで保護者へ学校での児童の様子を丁寧に伝えたりすることができた。 ・個人懇談で保護者から出てきた悩みから適切な関係機関につなげられるよう会議で報告し合った。	・引き続き年2回以上のかがやき参観・懇談を実施していく。懇談は事前に話すテーマを保護者へ周知し、興味をもって参加してもらえるよう工夫する。 ・引き続き、いつでも教室に入って見てもらいやすい環境を整える。かがやきタイムだけでなく、それぞれの教室での国語や算数の学習も見てもらう時間をつくる。今後も児童の実態を伝える研修会を実施する。 ・保護者へ児童の学校の様子を伝える際には、児童を支援した複数の教員で伝えていくとより様子がスムーズに伝わることを引き継ぐ。 ・学年が上がっても、ファイルを引き継ぎ、児童理解に努める。	○日頃からの地道な取組に敬服する。
		教職員の資質向上 ①研修等の充実	・授業力の向上と授業の改善をめざした校内研究会を実施する。	・全教員参加による校内授業研究会、事前研究、事後研究を実施する。 ・自主研修会でICT活用に関する交流を行い、ICT活用力を高める。	・教職員アンケートで「ICT機器（タブレット・モニターなど）を活用した教育活動を行っている」と回答した割合が90%以上になる。	B	・今年度は例年の3回の校内授業研究会の事前研・事後研に加え、市内発表もあったため、全学年が提案授業を行うことができた。また、市内発表に向けた学団研究会を実施し、全ての教員が授業力向上、授業改善のために研鑽を積むことができた。 ・授業に関する研究会6回に加え、UDの学校づくり、SSWやSC連携研修など、課題別研修を8回実施することができた。 ・教員間のタブレットに関する困り感が少なく、校内研修会を実施する機会がなかった。 ・教職員アンケートで「ICT機器（タブレット・モニターなど）を活用した教育活動を行っている」と回答した割合	・来年度も、様々な研修会を実施し、教員の資質向上に努める。また、次年度からは新たなテーマを掲げて授業研究を行うので、今年度までの積み上げを生かして、来年度に繋げていく。 ・研究の成果を校内全体に共有して、さらなる授業改善に努めていく。 ・タブレット端末が更新される機会でもあるので、今後ICT機器に関する困りごとがでた場合は、自主研修を行う。 ・引き続き、授業の活動の中で、ICT機器（タブレット・モニターなど）を活用するよう努める。	○目標数値に達しているのにB評価になっている。Aにするための具体的な方策を示すべき。 ○「タブレットを使った授業は分かりやすい」に対し否定的な回答をした9%の児童が取り残されることのないように。
		学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	・積極的に学校情報を発信する。 ・学校運営協議会と連携し、地域共同活動の活性化を図る。 ・自治協議会との連携	・授業参観等を学期に2回以上を実施し、学校生活の様子を公開する。 ・学校だよりを月2回発行し、地域にも配布する。 ・学校ホームページを週2回以上更新し、学校情報を積極的に発信する。 ・学校運営協議会と連携し、教育活動等に地域ボランティアの参加を推進する。	・保護者アンケートで「学校の様子や目指しているものなどを分かりやすく伝えている」と回答した割合が85%以上、「学校は保護者の願いに応えている」と回答した割合が75%以上。 ・読書ボランティアによる読み聞かせを全学年で実施、地域ボランティアの参加による学習活動を3回以上実施。	A	・保護者アンケートで「学校の様子や目指しているものなどを分かりやすく伝えている」と回答した割合が95%であったが、、「学校は保護者の願いに応えている」と回答した割合が74.6%にとどまった。 ・読書ボランティアによる読み聞かせを全学年で実施、学習支援ボランティア参加による放課後自主学習(2/10)2～4年生を対象とした九九道場(10日間)3年生対象の「昔の話を聞く会」1年生対象の「昔のあそび」、5年生のミシン学習見守り(6回)、夏休み自習室(3日間)を実施できた。 ・学校運営協議会委員と職員の懇談会を実施し、学校課題を共有した。	・引き続き積極的な情報発信に努め、学校経営に対する保護者や地域の理解を深めるよう努める。 ・各学期に2回以上授業参観等を行い、学校生活の様子を公開する。 ・保護者との対話を学校運営、学級経営の柱の一つに据え、保護者の思いに寄り添い連携して、学校課題の解決に取り組む。 ・学校運営協議会委員と職員の懇談会の実施や委員に日常の授業を公開を行い、学校課題を共有する。 ・学校だよりにて、自治協の行事を紹介し、保護者や職員に周知する。	○コロナ以降保護者の中に「自分だけ」という考えの人が増えた。実際に自分事にならないと気づかない人も増えている。引き続き、意識付けへの対応を。 ○学校が学ぶ場としてより広い環境に学校支援ボランティアが活動している。ボランティア自身も楽しめるよう活動を工夫していきたい。
		安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	・子どもたちの危機対応能力や災害の状況に応じた対応力を育てる。 ・学習環境の管理・整備を徹底する。 ・勤務時間の適正化に努める。	・登校指導（月1回）を行う。 ・見守り隊との連携を図る。 ・防災訓練（火災1回、地震1回）を実施する。 ・防犯訓練（不審者）を実施する。 ・一斉下校訓練（学期に1回）を行う。 ・学校で学んだ防災意識を家庭に返すよう促す。 ・安全点検を行う。（月1回） ・業務改善委員会（学期1回以上）を開き、超過勤務の状況を共有し、対応策について協議、職員会議に提案する。	・児童アンケートにおいて、①「訓練や学習を通して、災害が起きた時にどうすればいいか考えている」と回答した割合が80%以上、②「家族と災害時の対応の仕方について話しあっている」と回答した割合が70%以上である。 ・保護者アンケートにおいて、①「災害時の家族の避難場所や対応の仕方を話し合っている」と回答した割合が80%以上、②「学校は、災害時や不審者などの危機に対応し、行動の仕方を考えている」と回答した割合が90%以上 ・保護者アンケートで「学校は学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」と回答した割合が90%以上である。 ・超過勤務時間の月平均45時間以上0人に。	B	・学期ごとに1回ずつ避難訓練を実施した。児童アンケート①では、肯定的な回答をした割合は81%で目標と同程度であったが、昨年度よりも3%増えた。児童アンケート②では、肯定的な回答をした割合は61%で目標を下回ったが、昨年度とほぼ変わると改善されてきている。 ・保護者アンケート①では、肯定的な回答をした割合は78%で、②では肯定的な回答をした割合は91%で概ね目標を達成した。 ・保護者アンケートの結果は、88.3%で目標を少し下回った。 ・12月末現在超過勤務月平均45時間を超えている職員が2名いるが、3月末に向けて調整中である。	・訓練の際はもちろんのこと、災害などのニュースがあったときにその都度災害時の対応を考えさせることで、日ごろから防災への意識をつけさせる。 ・子ども防災手帳を児童1名につき1冊配布し、1．17の日までに必ずするか各クラスで確認する時間を作る。各家庭でも防災意識を高めてもらうために、その手帳を活用してもらうよう呼びかける。（災害時に誰に連絡するか、家の近くの避難場所の確認、災害時の待ち合わせ場所など） ・学校のUD化を始めとして、子どもが活動しやすい学習環境についての研修を行い、改善に努める。 ・My定時退勤日の完全実施、直帰出張の推奨に取り組むと共に、会議設定時間の適正化、ICTを活用した業務改善を行うことで、職員の意識改革を図る。	○学校運営協議会委員と教職員の懇談会のさらなる充実をめざしたい。 ○近年の災害事情からも、児童防災手帳の取組を続けてほしい。 ○地域防災における高校生の力は大変重要。災害を「自分事」として捉える様々な取組を地域全体で行って行く必要性を感じる。 ○保護者の願いとは何なのかを明らかにし、改善策を検討していただきたい。

学校関係者評価総括	○学校運営の業務が多岐にわたり、それぞれに重要な意味をもつことはよく分かる。達成目標も数値化されているものが多く評価も容易である。一方で重点目標、項目の嘉瑞が多く、通常業務とも混在しているため、何が課題で、何に重点を置いて取り組んでいるのかが分かり難い。重点指向の強化が必要。 ○例年よりB評価が多くなっているように感じる。次年度はA評価が増えることに期待する。 ○今後も小中高の連携の充実に期待する ○体育、食育の重要性を強く感じる ○保護者の学力向上研修会は、良かった。1年生の保護者に復習の大切さを伝えてほしい。
次年度に向けた重点的な改善点	・家庭やPTAと連携し、「早寝・早起き、朝ご飯」の基本的生活習慣を意識づけると共に、スクリーンタイムの削減、適切な睡眠時間の確保に取り組む。 ・児童の問題行動に対して組織的な対応を行うとともに、保護者との情報共有を密に行い、連携して指導できる体制を構築する。 ・児童支援教員、不登校支援員の活用、サポートルームの設置等、全教職員による組織的な取組によって、不登校児童の削減を図る。 ・家庭学習の習慣の獲得と共に、基本的な四則計算や漢字の習得をめざす。 ・「めざす子ども像」を児童と共有し、児童が主体的に活動できる学校行事や特別活動の機会を増やすなど、児童が活躍する場のある学校づくりを行う。 ・全国学力・学習状況調査、CRT調査等の結果を分析して学校課題を明確にし、解決に向けた取組を全校で実施する。また、その成果を検証するための研修会を持つ